

Oct. 1936.

215

MATSUMURA, Index Pl. Jap. II (1912) p. 633.

Senecio Inumae MAKINO in Tokyo Bot. Mag. VI (1892) p. 55 nom. nud., X (1896) p. 72.*Cacalia Inumae* MAKINO in Tokyo Bot. Mag. XII (1898) p. 80.*Senecio Makinoi* C. WINKLER in Acta Horti Petrop. XIII (1893) p. 6

Nom. Jap. Oh-momijigasa, Tosano-momijigasa, Momijigasa.

Hab. Japonia, Hondo, Iwaki, Hidachi, Musashi, Shinano, Yamato, Kii, Tajima, Iwami, Bingo. Kiushiu, Chikugo, Bungo, Higo. Shikoku, Iyo, Awa, Tosa.

フォーリー氏採品の地名二三に就て

大井次三郎

故 U. FAURIE 氏が本邦植物學界に貢獻した事は實に大きくその足跡も本邦領内殆ど全部に亘つて居る。又その標本のラベルも比較的正確ではあるが、外國人であつた爲めに地名については今日はずきりせぬ名稱があるのは残念である。Guwassan, Ganju, Shakotan, Bunkiko 等が各々羽前月山, 陸中岩手山, 北海道後志國積丹, 臺灣阿里山に近い奮起湖であるのはよく知られて居る。Mt. Tsurugi (san) は阿波國劍山でその内の一部。初期のものは東北地方のどこかの相當高い山を指すのであるがはずきりしない。Okumasan も東北地方で多分 Okomasan の誤記であらうが御駒山と云ふのが東北地方に數座ある。しかし恐らく陸中駒ヶ岳の事を指したのであらう。Mt. Komagatake は西駒か東駒かはづきりしない。Adzuma は宮部金吾先生の御厚意によつて北海道の苫小牧に近い厚真である事がはずきりした。植物名鑑では Kamitsuge を上野國と解して居るが此れは伊賀國の上柘植の事である。

抄 録

耿以禮氏：— 亞細亞産トダシバ屬の種類 (Y. L. KENG, Asiatic Species of *Arundinella*, in National Central University Science Reports, ser. B, Biology, vol. II, No. 3, pp. 1-8, June 30, 1936 (May 30, 1936).

トダシバ屬 *Arundinella* RADDI は始め南米のブラジル産の種類によつて記載されたのであるが、殊に亞細亞の熱帯に多く本屬の大部分を占める。僅數が暖帯に固有であつて全世界で約 50 種程に上る。本書はその内の亞細産の種類 32 種に關する綱要でまづ本屬を Subgenera, 1. *Psilachne*, 2. *Chalynochlamys*, 3. *Arundinella* proper. 4. *Miliosacch-*

arum の四亞屬に大別して居る。 *Psilachne* は著書に従へば有實小花 (fertile floret) は毛茸がなく又芒もない最も原始的な群で此れは本邦にその代表種がない。 *Chalynochlammys* は本邦のトダシバを含む小群で尙その他に支那湖南省から記載された *A. fluvialis* HAND.-MAZZ. があり、此れは著者はトダシバの變異中に含まれるべきものかと考へて居るが、挿圖で見ると實際良く似たものである。次に著書の見て居らない種類として本邦の *A. paniciformis*, *A. oleagina*, *A. riparia*, *A. murayamae*, の四種を列擧してあるが、此れも著者の暗示する様にトダシバと種を別にすべき程の差はない様に思はれる。尙耿氏はトダシバに *A. anomala* STEUD. を用ひて居るが此れは *A. hirta* と改めらるべきである。此種で區別されて居る澤山の變種は耿氏の云ふ様に重要なものではない。有實類 (fertile lemma) の先端に膝曲する芒があつてその左右に短かい芒のない *Arundinella* proper 群では最も種類が多くて 21種もあるが本邦にも分布するのは臺灣産の *A. pubescens* MERR. et HACK. (= *A. hispidula* f. *humilior* HACK. = *A. caespitosa* JANOW.) シバガヤ一種である。膝曲する芒の兩側にも小芒のある *Miliosaccharum* 群は臺灣に *A. setosa* TRIN. ヒガヤなる代表種がある。

各種類に亘つて一々詳細な英文解説と挿圖とがあり、本屬に對する良い参考書である。 *A. cochinchinensis*, *A. flavida*, *A. chenii* は新種である (大井次三郎)

フアセツト氏 オホバタケシマラン屬の研究 — N. C. FASSETT, A Study of *Streptopus*, in *Rhodora* 37 (1935) 88—113.

此の研究は北米各地に散在する大學や博物館の標本を基礎にしたものであるが、東亞の材料については豊富ではなかつた様であるにもかかわらず、全体としてよくまとまつた小論文で吾々に取つても参考にすべき點が多い。本屬で目立つ形態方面の特徴は花梗の出方であるが、オホバタケシマランで GOEBEL (1931) は各花は頂生してその葉腋の側芽が主軸の様な状態に成ると考へたが此れは ARBER (1910) の解釋する様に腋生で花梗が莖と癒合したものであり、此の事は北米産の同屬の他種を調べるとよく解ると云ふ。

タケシマラン屬 (*Kruhsea*) を本屬から分つか否は各個人の判断による外はないが屬としては餘り明瞭ではなく節としては著しい。著者は花序の特徴である花梗の合着と全体の變異が同じ理由で同一と考へて居る。

扱此屬は著者によれば七種とそれの變種とから成り、その名稱分布は次の様に成る

- 1) *S. simplex* DON (英領印度及び支那)
- 2) *S. parviflorus* FRANCH. (支那)
- 3) *S. amplexifolius* DC. var. *genuinus* (南歐の山地) var. *chlamys* FASSETT, v. n. (北米西部)